

198 パリ・モンソー公園の石灯籠（2023 年 9 月 28 日）

パリ 8 区にある日本大使館の隣には、モンソー公園があります。約 8.2 ヘクタールの広々とした公園には、四季折々の花が咲き、ここはいつも多くの人で賑わうパリ市民の憩いの場になっています。

モンソー公園は、オルレアン公爵ルイ・フィリップ二世（1747-1793）が、1769 年から 1773 年にかけて、自身が所有していた土地に作らせた庭園が始まりです。

「幻想の世界」を作りたいと考えたオルレアン公は、庭園の風景を飾るために、ローマ、オリエンタルや他のものから着想を得た庭園建築物（フォリー）を置きました。庭園には、オランダ式水車、パゴダ

（注：本来の意味は仏塔だが、庭園には中国趣味の塔を指す。）、ピラミッド（現在も園内にあり。）やローマ遺跡がありました。後に、この土地はパリ市の所有となり、1861 年に公園として一般公開されました。右上のポストカードと右下の現在の写真には、いずれもオッシュ通りに面した鉄門が写っています。右上のポストカードには馬車が写っていますので、19 世紀に撮影された写真を使ったものではないかと考えられます。今も当時と同じ姿で立つ鉄門は、この公園の歴史を私たちに感じさせてくれます。



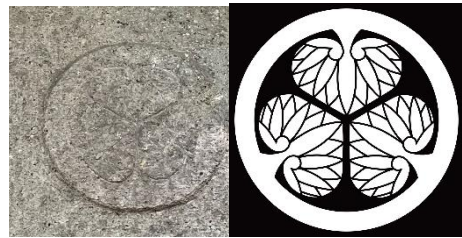
実は、この公園の中には、日本の石灯籠があります（写真右）。これは、1982 年に友好都市提携を結んだパリ市と東京都が、双方の更なる友好関係の発展を願って、1986 年に鈴木俊一東京都知事（当時）からジャック・シラク・パリ市長（当時）に対して贈られたものです。この石灯籠は、東京上野の寛永寺にありました。[「浮世絵による東京観光案内（その2）」](#)でご紹介したとおり、寛永寺は、徳川将軍家とゆかりのある寺です。1786 年に第十代将軍の徳川家治が亡くなったときに、誰かが寛永寺に寄進した石灯籠です。写真では判別で



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

きませんが、六角形の二つの台座の上にある円筒状の石には、文字が彫られています。「浚明院」（しゅんめいいん）という家治の戒名や寛永寺を意味する「東叡山」（とうえいざん）という文字が刻まれているのを読むことができます。ただし、経年劣化によって、寄進した人物の名前を判別することはできません。寛永寺にはかつては歴代の将軍が亡くなったときに寄進された石灯籠が数多くありました。後に、寺から各地へ移築されたことから、日本国内には同じ形の石灯籠がいくつも残されています。

石灯籠の上部の穴があいた部分は、火袋（ひぶくろ）と呼ばれる火をともし場所です。少し分かりにくいですが、火袋の側面には、三つ葉葵と呼ばれる徳川将軍家の家紋が刻まれています（右は、石灯籠に刻まれた紋の写真と三つ葉葵紋のイラスト）。この家紋からも、徳川家にゆかりの石灯籠であることがわかります。



石灯籠の説明を書いたプレートは目立たないので気付かない人が多く、この石灯籠を見ても何だかわからない方が多いと思います。ただの古い石に見えるかもしれませんが、実は17世紀から19世紀の日本を支配した徳川幕府の将軍にゆかりがあり、フランス革命とほぼ同じ時期に作られた貴重なものです。モンソー公園を散歩される機会があれば、ぜひこの石灯籠もご覧になってください。

